

Title	戦争詩人たちの「死」と「大地」(1) : Brooke と Grenfell について
Sub Title	The imagery of the earth and death in war poetry (1) : Rupert Brooke and Julian Grenfell
Author	足立, 健次(Adachi, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.37 (2001. 3) ,p.1- 12
JaLC DOI	
Abstract	<p>The English poetry of the First World War can be divided into two periods. Rupert Brooke, Julian Grenfell and Charles Hamilton Sorley belong to the early period, beginning with the outbreak of the War in 1914 and extending to the Battle of the Somme in 1916. Wilfred Owen and Isaac Rosenberg are some of the poets who represent the later period from 1916 to 1918. In this paper, I tried to consider the poetic works of Brooke and Grenfell, particularly in terms of the earth and death. Brooke suggests that when a soldier dies on a foreign battlefield, he becomes a body of his native land, a part of English territory by returning to the earth, because even if it is foreign, it is the earth where lies dead his dust which has been produced by England. On the other hand, for Grenfell death brings a new life to the man who fights and dies, and through his deed he can take part in the increase and proliferation of the natural world. In other words, according to Brooke, the richness of the earth is given by England, while Grenfell tells us that the man must fight in order to win the natural power of increase by himself. Brooke and Grenfell are different from each other in their image of the earth and death. But both of them have an old and romantic view of the war on the basis of the earlier wars. The desperate efforts to bridge the gap between a romantic war and an actual one are to be left to the other war poets.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20000930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦争詩人たちの「死」と「大地」(1)

—Brooke と Grenfell について—

足立健次

英国において、第一次世界大戦ほどすぐれた詩人を世に輩出した戦いは歴史上それまでなかった。職業軍人ばかりでなく、志願兵や徴兵として史上初めて教育ある民間人がこの戦争に参加したというのが、その主な理由であろう。それ以前のナポレオン戦争は、近代的な全面戦争の様相を多少なりとも呈していた¹とは言え、やはりクリミア戦争とともに、主として職業軍人によって戦われたものであった。また教育ある民間人を巻き込んだ近代における最初の大規模な戦いはアメリカの南北戦争であったが、これに英国人が直接かかわるということはなかった。この意味で、第一次世界大戦は英国にとってそれまで体験したことのない未曾有の戦争であったと言える²。

1914年8月に始まった第一次大戦は、当初19世紀流の限定战争的な性格の強いものと見られ、その年のクリスマス頃までには決着がつくであろうというのが大方の予想であった。しかし、様々な要因が重なり、それは誰も予想だにできなかった、市民をも巻き込んだ、いつ果てるとも知れない世界的規模の全面戦争へと結果的に突入してしまうことになる。

この史上類のない戦争を主題として書かれた、英国のいわゆる戦争詩³は、1916年のソンム川 (the Somme) の戦いを転機として前期と後期とのふたつに分けるのが通例である⁴。Sassoon, Owen, Blunden, Rosenberg といった詩人たちは後期に属し、前期に含まれるのが今回ここで取り上げる Brooke と Grenfell の二人の詩人、および Sorley である。後者

三人はいずれも夭折したという点では共通している。しかしながら、彼らが現実世界において迎える死というものが、生前の詩作品の中にどのような形で影を落としているかは詩人によって異なるのである。以下において、「死」と「大地」のイメージに主たる焦点を絞りつつ、それぞれの戦争詩人を検討することにより、彼らの共通点と特徴の一端を明らかにしてみることにはしたい。

I

まず始めに、議論の足がかりとして、Rupert Brookeの五つの連作ソネット 1914 *Sonnets* の中から、最もよく知られている 'The Soldier' と題されたソネット V を取り上げてみることにしよう。

If I should *die*, think only this of me:

That there's some corner of a foreign field

That is for ever England. There shall be

In that rich *earth* a richer *dust* concealed;

A *dust* whom England bore, shaped, made aware,

Gave, once, her flowers to love, her ways to roam,

A body of England's, breathing English air,

Washed by the rivers, blest by suns of home.

And think, this heart, all evil shed away,

A pulse in the eternal mind, no less

Gives somewhere back the thoughts by England given;

Her sights and sounds; dreams happy as her day;

And laughter, learnt of friends; and gentleness,

In hearts at peace, under an English heaven.

たとえ兵士 (soldier) たる自分が異国の地で死んだ (die) としても、そこは英国である。なぜなら、その地は英国が生んだ自分の肉体が死んで土となって帰る場所だからだ。死という本来ネガティブなものと結びついていた土 (earth, dust) のイメージは、英国の大地の肥沃さとの連想を強めることによって理想化されてポジティブなものに転化され、死は決して不毛なものではなく、むしろ豊かさの象徴となる。こうして詩人の肉体は、たとえ祖国を遠く離れた異郷において滅びようとも、そこでより豊かな土になることによって、永遠に英国の肉体、すなわち英国の領土の一部となるのである。

このことは、ソネットVに先立って書かれたソネットIV 'The Dead' の中ですでに暗示されていた。本文そのものの中にこそ「死」という言葉を見出すことはできないが、そのタイトルによって主題が示されていることは、改めて指摘するまでもないことである。

These hearts were woven of human joys and cares,
 Washed marvellously with sorrow, swift to mirth.
 The years had given them kindness. Dawn was theirs,
 And sunset, and the colours of the *earth*
 These had seen movement, and heard music; known
 Slumber and waking; loved; gone proudly friended;
 Felt the quick stir of wonder; sat alone;
 Touched flowers and furs and cheeks. All this is ended.

There are waters blown by changing winds to laughter
 And lit by the rich skies, all day. And after,
 Frost, with a gesture, stays the waves that dance
 And wandering loveliness. He leaves a white
 Unbroken glory, a gathered radiance,

A width, a shining peace, under the night

前半の八行連句 (octave) では、若き詩人が過ごした日々の営みが、感覚的 (seen, heard, felt, touched) および情緒的 (joys, cares, sorrow, mirth) 体験として語られている。

次の六行連句 (sestet) では、死の訪れとともに、こうした日常体験は終わりを告げ、それらは集められて (gathered)、永遠不滅の輝きとなる。Brooke の言う栄光 (glory) が放つ「輝き」には、後に議論の対象となる Grenfell の詩全篇にみなぎる躍動的な生命力は感じられない。

その後の戦争の成り行きを考慮するならば、ここで語られている「死」には余りにも現実感が希薄であると言わざるを得ない⁵が、連作ソネットが書かれた当時の状況というものを考えるならば、それもまた無理からぬことであった。

Rugby 校の舎監の息子として生まれた Brooke (1887-1915) は、父親の勤める学校に通い、そこで勉強の面においてもまた運動の面においても並々ならぬ才能を発揮し、1906年に Cambridge 大学の King's College に進んでいる。彼は当時の指導的な知識人の一人と目され、詩の創作、芝居の演出などに熱中し、また社会的・政治的問題に対しても強い関心を抱いていた。最初の詩集は1911年に出版され、1912年に Edward Marsh と共に *Georgian Poetry* を出版する計画をしている。こうした活動の合い間を縫ってヨーロッパ大陸を訪れたり、また短期間ではあるが、Cambridge にほど近い Grantchester の古い牧師館に住んだこともあった。1913年にアメリカ・カナダ経由で南洋への長い船旅に出発しているが、まさに大戦前夜とも言うべき1914年7月にこの旅から帰国する。

8月に大戦が勃発すると、彼は大学時代の友人たちと共にライフル銃隊 (the Artist's Rifles) に加わるが、将校の地位に就くためにそこを退く。9月に、時の海軍大臣 Winston Churchill が提供してくれた英国海軍部にポストを得て、ベルギー北部の大都市アントワープの救出作戦に参加する

ものの失敗に終わっている。

この短い戦闘の間、Brookeは戦争による大破壊がもたらした、見るも無残な結果を目撃するものの、自身はほとんど砲火にさらされることはなかった。秋から執筆していた1914と題された五つのソネットがこの年のクリスマス休暇期間中に完成される。翌1915年4月、大隊を率いてトルコのGallipoliに向かう船中で急性の敗血症にかかり、ほとんど実戦を経験することのないまま病死している。

II

Brookeと同じ初期の戦争詩人としての共通性を備えながらも、いくつかの点で対照的なのがJulian Grenfell (1888-1915)である。

のちにDesborough男爵になる父親の長男として、Brookeよりも数ヶ月遅れて生まれた彼は、スポーツ好きであると同時に、神秘主義者にして理想主義者という、これとは異なる別の側面があった。彼は、ジョージ朝芸術の最高のパトロンであったMarshがロンドンの文学界に熱心に紹介していた才能ある詩人・画家・音楽家たちのひとりに数えられていたと伝えられている⁶。従って、GrenfellとBrookeのふたりがMarshを介してどこかで出会っていたという可能性を否定することはできない。詩人としての才能に恵まれながらも、Grenfellは軍人になりたいという強い願望を捨てきれず、大戦が始まる四年ほど前の1910年に騎兵連隊(Royal Dragoons)に入隊している。連隊は最初インドに配属され、後にアフリカに移動し、大戦の勃発とともに英国に戻るように命ぜられる。1914年10月にフランスに赴き、竜騎兵連隊が塹壕の中で歩兵に変わると、Grenfellはドイツ軍の狙撃兵にこっそり忍び寄って、至近距離から彼らを射殺したと言われている⁷。こうした武勲により殊勲報告書に二度その名を連ね、勲章を授与されている。1915年5月、致命傷を負う一週間ほど前に、彼の名を広く世に知らしめることになる一篇の詩“Into Battle”が家族宛てに送られ、その詩は彼の戦死が正式に発表されたのと同じ日の*The Times*紙に

掲載された。Brooke が病死するおよそ一ヶ月前のことであった。

Brooke と Grenfell のこの死のあり方が、「死」に対する両者のイメージの違いを表わしているとも言えよう。あるいは、両者の「死」のイメージの相異がそれぞれの死を映し出していると言ったほうがよりの確であろうか。

The naked *earth* is warm with spring,
 And with green grass and bursting trees
 Leans to the sun's gaze glorying,
 And quivers in the sunny breeze;
 And life is colour and warmth and light,
 And a striving evermore for these;
 And he is *dead* who will not fight;
 And who *dies* fighting has increase.

The fighting man shall from the sun
 Take warmth, and life from the glowing *earth*;
 Speed with the light-foot wind to run,
 And with the trees to newer birth;
 And find, when fighting shall be done,
 Great rest, and fullness after dearth.

All the bright company of Heaven
 Hold him in their high comradeship,
 The Dog-Star, and the Sisters Seven,
 Orion's Belt and sworded hip.

The woodland trees that stand together,

They stand to him each one a friend;
They gently speak in the windy weather;
They guide to valley and ridge's end.

The kestrel hovering by day,
And the little owls that call by night,
Bid him be swift and keen as they,
As keen of ear, as swift of sight.

The blackbird sings to him, 'Brother, brother,
If this be the last song you shall sing,
Sing well, for you may not sing another;
Brother, sing.'

In dreary, doubtful, waiting hours,
Before the brazen frenzy starts,
The horses show him nobler powers;
O patient eyes, courageous hearts!

And when burning moment breaks,
And all things else are out of mind,
And only joy of battle takes
Him by the throat, and make him blind,

Through joy and blindness he shall know,
Not caring much to know, that still
Nor lead nor steel shall reach him, so
That it be not the Destined Will.

The thundering line of battle stands,
 And in the air *death* moans and sings;
 But Day shall clasp him with strong hands,
 And Night shall fold him in soft wings

第一連と第二連に注目しつつ、Grenfell にとっての「死」の意味と「大地」がもつイメージを吟味してみることにしたい。

むきだしの不毛な (naked) 大地 (earth) が、春 (spring) の訪れとともに、栄光を授ける太陽 (sun) の眼差しを受けて緑の草木 (grass, trees) におおわれる。この時、天に輝く星の一団も、風にそよぐ樹木も兵士たちの味方となる。それと同時に、優れた兵士に必要なとされる資質が、それに相応しい鳥や動物たちに託して謳われる。その資質とは、すなわちハヤブサ (kestrel) の敏捷さ、フクロウ (owls) の警戒心、馬 (horse) の忍耐力である。最終連では、これらの鳥や動物たちの助言と励ましを受けて、兵士は、死 (death) が空中でうめき声を上げている盲目的歓喜と狂乱状態の中で、戦闘の真っ只中へと (into battle) 突入して行く。

ここで第一連と第二連に改めて目を転じてみるならば、Grenfell にとっては、戦わない者こそが真の意味において死んだ状態にある (dead) のであって、戦って死ぬ (dies) 者は、その戦闘行為を通じて、「大地」によって代表される自然界の増殖 (increase) にあずかり、「大地」から生命を受け取ることができるのだ。

III

すでに考察したように、ソネット V ‘The Soldier’ において Brooke は第一人称で読者に語りかけていた。そこで言う「私」は英国人であって、英国人として外国で死ぬことは永遠の栄光であるのだが、その栄光はあくまでも「私」を生み育てた英国によって与えられたものである。

一方、Grenfell の言う増殖とは、与えられるべきものではなく、戦うこ

とによって自ら勝ち取るべき新たな生 (newer birth) である。従って、ここで言うところの戦闘員 (fighting man) は、必ずしも英国人である必要はない。それはドイツ人であってもかまわないことになる。そこに両者の相異を見て取ることができるだろう。

しかしながら、この戦闘員はまた、職業軍人であった Grenfell 自身が理想とする騎兵隊 (cavalry) に、さらに言うならば、それ以前の伝統的でロマンティックな騎士道 (chivalry) の世界に所属する戦士 (warrior) のごときものでもある。そして、chivalry がフランス語の cheval (馬) に、cavalry がイタリア語の cavallo (馬) にそれぞれ由来するものである⁸という事実を踏まえるならば、それが、古来馬と切っても切れない関係で結ばれてきた戦士としての騎士・騎兵にほかならないことは明らかである。Brooke が抱いた、栄光を求める愛国的な兵士像もまた一時代前のものであったことをここで思い起こしてみるならば、旧態依然とした兵士像から脱却できなかったという点において両者は共通していると言えるだろう。

だが、古代世界のタンク⁹として恐れられ、中世においては騎士の、また近代においては騎兵の最強の伴侶として戦場を駆けめぐり、今また Grenfell によってその忍耐力ゆえに戦士の鑑として賛美された馬は、第一次大戦を契機として今まさに戦いにおける主役の座を近代兵器たるタンクに明け渡そうとしていた。

Brooke と Grenfell が、「馬」によって象徴される一騎打ち的な要素を含んだ限定的な戦いから、無差別殺戮につながる近代兵器としての「タンク」によって代表される全面戦争への転機となったこの戦争の行く末をどこまで察知していたかは、にわかに断定しがたいことである。しかし、「馬」によって象徴される、ロマンティックな理想世界と、「タンク」というこの戦争によって新たに出現した現実世界との落差を埋めようとする必死の努力は、他の戦争詩人たちによって受け継がれていったことは確実にある。

(つづく)

NOTES

- 1 神谷不二 (編), 『二十世紀の戦争』 (講談社), pp. 24-5.
- 2 John Lehmann, *The English Poets of the First World War* (Thames and Hudson, 1981), p. 7.
- 3 テキストには Jon Silkin ed., *First World War Poetry* (Penguin Books, 1979) を用いた。なお引用文中のイタリック体は筆者によるものである。
- 4 John Lehman, *op. cit.*, p. 8.
- 5 John H. Johnston, *English Poetry of the First World War* (Princeton University Press, 1964), p. 33.
- 6 *Ibid.*, p. 37.
- 7 Robert Giddings, *The War Poets* (Bloomsbury, 1988), p. 49.
- 8 Bernard Bergonzi, *Heroes' Twilight* (Macmillan, 1980), p. 51.
- 9 Kenneth Clark, *Animals and Men* (William Morrow, 1977), p. 35

Synopsis

The Imagery of the Earth
and Death in War Poetry (1)

—Rupert Brooke and Julian Grenfell—

Kenji Adachi

The English poetry of the First World War can be divided into two periods. Rupert Brooke, Julian Grenfell and Charles Hamilton Sorley belong to the early period, beginning with the outbreak of the War in 1914 and extending to the Battle of the Somme in 1916. Wilfred Owen and Isaac Rosenberg are some of the poets who represent the later period from 1916 to 1918.

In this paper, I tried to consider the poetic works of Brooke and Grenfell, particularly in terms of the earth and death.

Brooke suggests that when a soldier dies on a foreign battlefield, he becomes a body of his native land, a part of English territory by returning to the earth, because even if it is foreign, it is the earth where lies dead his dust which has been produced by England. On the other hand, for Grenfell death brings a new life to the man who fights and dies, and through his deed he can take part in the increase and proliferation of the natural world. In other words, according to Brooke, the richness of the earth is given by England, while Grenfell tells us that the man must fight in order to win the

natural power of increase by himself.

Brooke and Grenfell are different from each other in their image of the earth and death. But both of them have an old and romantic view of the war on the basis of the earlier wars. The desperate efforts to bridge the gap between a romantic war and an actual one are to be left to the other war poets.